早稲田

りぶまぐ！3・5

活動紹介

LIVSとは

正式名称、早稲田大学図書館ボランティアスタッフ〈Library Volunteer Staff〉通称LIVS（リブス）は、学生視点での図書館サービスの企画・提案を目的とした学生ボランティア団体として、2013年4月に発足しました。
図書館の業務を行うのではなく、学生にとって魅力的な図書館を目指し、利用案内・学習支援・読書推進などの視点から、イベントや展示を企画・実施しています。

主な活動紹介

・図書館紹介冊子 『りぶまぐ！』

2016 年4月に発刊してから(一応)定期刊行している『りぶまぐ！』。
これまでの vol.1～3は早稲田大学中央図書館または早稲田大学図書館Webサイトの LIVSページで閲覧可能です！

・新入生に贈る一行 （企画展示）

毎年春に行う人気企画！ LIVSメンバーが選んだとっておきの一行で図書館中を埋め尽くし、新入生や皆さんの新生活を応援しました！

まだまだLIVSの活動は続きます！！

11月3日(土)、4日(日)は早稲田祭！ということで、早稲田大学図書館ボランティアスタッフLIVSでは、それぞれのメンバーが「早稲田」もしくは「祭」をテーマに記事を書きました。
テーマ以外は、何を紹介するかもレイアウトも全部自由。集まった記事は、自由で多様性に溢れ、それぞれの好きなことや興味のあることが詰まっています。
そんな「早稲田祭」らしさを、どうぞお楽しみください。

目次

初 秩父事件と祭り 小澤智佳
1 早稲田大学の学生服 中村綾
2 日本の祭り　それぞれの祈り 市村香菜美
3 WASEDAクロスワード 渡辺美優
4 不穏な学園祭 中村朱里
5 学外アクセス使い方講座 百足祐希乃
6 学校×祭＝文化祭！ 田嶋理彩
7 活動紹介

8 参考文献

9 ようこそ、祭の狭間の場所へ・・・ 蔭山俊介

10 世界の祭り 高橋侑希

11 １００年前の早稲田大学生活 弦間沙羅

12 早稲田祭の歴史を紐解く！ 小川祐佳

13 大隈重信と自動車 松本周

14 気になる大学祭 大﨑千春

15 戦争と図書館 井出経太

16 ゆかたはどこから来たの？ 白鳥絢子

他 本を持て、街に出よう！ 中野志保

青春の象徴＝夏祭り？

浴衣を着て、屋台を巡って、
金魚すくいをして、花火を見て…
そして…憧れのあの人と手とか
繋いでみちゃったりして…
『**祭**』と聞いて多くの方が思い浮かべるのは、
おそらく**青春の甘酸っぱさの象徴**である
『夏祭り』
ではないでしょうか。
…しかし、一つだけ言わせて
いただきたいことがあります。
『もう一つ、青春の祭りを
お忘れではないですか？』

学校×祭＝文化祭！

そう、**文化祭！**

本番当日に向けて準備を進めていく中で、
友人や気になるあの子との距離がぐっと
縮まることもあるのではないでしょうか。
そこで、**文化祭にまつわる作品**をご紹介！
ひょんなことから文化祭でとある競技を
披露することになってしまった、
男子高校生たちの**最高に熱く愛おしい**一作です。

「WATER BOYS」

２００１年／監督：矢口 史靖／主演：妻夫木聡

廃部寸前の水泳部唯一の部員である智。
そんな水泳部の顧問に美人教師が着任。
一時は部員が急増するものの、
彼女が指導したかったのはなんと、
シンクロナイズドスイミング！
強烈な個性を持つ、残った部員5人で
泣く泣く学園祭に向けて練習をすることに。
「男がシンクロ！？」と馬鹿にされながら、
怪しげなイルカの調教師の指導を受けつつ、
懸命に練習を重ねていく5人。
基本すらも満足にできないシンクロへの苛立ち。
**加えて好きな子ができても、シンクロをしている
ことを伝えられない智。**
そんな彼らを度重なるハプニングが襲う…
果たして無事**文化祭で披露できるのか！？**

早稲田大学の図書館・読書室で楽しめるんです！

『WATER BOYS』は、所属学部に関係なく、
**11号館B1F、商学部・国際教養学部学生読書室で利用
可能です！(※館内利用のみ)**
そしてなんと！
中央図書館4Fには、**AVルーム**があるのです！
月～金曜の**9:00~18:00**（土曜は~16:00）に、
AVルームで利用申込票に記入し、
カウンターで申し込めば所蔵されている
膨大な数の映画が視聴可能なんです！
ぜひ、空き時間に**青春を体感**しませんか？

早速「早稲田大学」と検索してみたいところですが、そのまま検索したのでは、デフォルト指定で近年の記事しか出ないことも……。そこで、まずは時代指定を確認しましょう！　明治・大正・昭和の記事が検索できるタブを選択すると、昔の記事も表示されるようになりますよ。

ここまできたら、いよいよキーワード「早稲田大学」を入力して検索します。すると、なんと朝日新聞と読売新聞の一番昔の記事は一八八二年のものです！　一八八二年といえば、早稲田大学の前身となった東京専門学校が創設された年。そして、最初の記事は東京専門学校の創設に関するものです。どうやら、「早稲田大学」と検索すると「東京専門学校」もヒットするようになっているようですね。最初の頃の早稲田大学に関する記事は、大隈重信や立憲改進党という名が目立ちます。それだけ大隈重信や東京専門学校に対する政治的な関心が大きかったのでしょう。読売新聞では、なんと一八八二年の九月から十月にかけてだけで、五度も東京専門学校に関する記事が掲載されています！　早稲田大学は創設当初から大きな関心の的だったんですね。

この他にも、「早稲田大学」についての記事は様々あり、色々見ていくと、早稲田大学のこれまでの歩みと世間の見方がよくわかります。また、新聞ごとの扱いかたの違いもかなり興味深いものになっています。とはいえ、全て紹介することはできないので、名残惜しいのですが紹介するのはこの辺にしておきましょう。続きが気になったら、ぜひ学外アクセスを使ってみてくださいね！

ちなみに、「早稲田祭」と検索しても、興味深い記事が見つかりますよ。かつての早稲田祭で、何があったのか。今年の早稲田祭に参加している人間として、知っておくべきかもしれません。早稲田祭に対する見方もガラリと変えるような記事がたくさん見られます。中身が気になる方は、早速学外アクセスへ！



最後に

どうでしょう？　学外アクセス、意外とカンタンで面白そうではないですか？　これが使いこなせれば、レポートや論文だってグッと楽になるはず。あなたの知りたいことを、より深く調べることができる学外アクセス、目一杯活用してください！

学外アクセス使い方講座　戦前の新聞を調べてみよう

「学外アクセス」って、ちゃんと活用してますか？　名前は聞いたことあるし、使い方を習ったりもしたけど、あまり使ってないという方も多いのでは？　でも、学外アクセスを使わないって、実はとってももったいないんです！　ここでは、便利なのに忘れがちな、学外アクセスの使い方を見ていきましょう！

どうやってログインするの？

学外アクセスとは、早稲田大学の教職員・学生等が、早稲田大学が契約しているデータベース・電子ジャーナル・電子ブックを学外から利用できるというすごいサービスのことです。ログインの仕方は結構カンタン。例えば、早稲田大学図書館のOPACであるWINEからなら、画面右側の「学術情報検索」をクリック→画面左上の「学外アクセスへログイン」をクリックすることで、学外アクセスへのログイン方法が詳しく書かれている画面に移ります。あとは指示に従って「上記に同意して学外アクセスにログインへ」をクリックして、Waseda IDとパスワードを入力するだけ！　これだけで、様々な外部のデータにアクセスできちゃうんです。ちなみに、学外アクセスを利用したあとはきちんとログアウトすることをお忘れなく！

実際に使ってみよう

それでは、実際に学外アクセスを利用してみましょう。さわりだけですが、ここでは、我らが「早稲田大学」について調べてみますよ！

学外アクセス可能なデータベースはたくさんありますが、今回は新聞記事を検索してみます。

早稲田大学で契約している国内の主な新聞記事の学外データベースは、四種類。朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞です。これらのデータベースは「学術情報検索」の画面の「おすすめのデータベース」から楽にアクセスできるようになっています！

不穏な学園祭

学園祭が近づく季節。いつもと様子を変える校舎。そこは非日常……ということでこのページでは、学園祭が舞台の小説をご紹介いたします。非日常の中で起きる**ホラー**や**ミステリー**をお楽しみください。

ご紹介する三冊は、すべて早稲田大学図書館および学生読書室に所蔵されています。

Mystery

『秋の花』北村薫

文化祭の準備中、一人の女子高生が屋上から転落して死んでしまった。



事故として処理された真理子の死を境に、彼女の幼馴染である利恵は憔悴し、抜け殻のようになっていく。彼女はどうして死んでしまったのか、誰かに殺されてしまったのか。きっと利恵が何かを知っている。何かを暴いてもらいたがっている。二人の先輩である大学生の「私」は、落語家の円紫さんを頼り、事件の核心に迫ろうとする。

「明日輝くような何かをしようと思った、その明日が消えてしまったら、どうなのですか。その人の《生きた》ということはどこに残るのです」真相を知った「私」の問いに、円紫さんはこう答える。「それでも、その意思が残ると思います。……この世に生きている皆なの生活の中の、言葉でも動作でも、あるいは一瞬の表情一つでも、それが本当にいいものならば、どこか永遠に残るような気がするのです」。

ミステリーといえば、謎解きが一番の魅力でクライマックスだろう。しかし現実には、謎を解いた先にも大切な人を失った世界で余儀なく生きている人々の人生がある。そんな中でこの作品は、謎解き後のシーンも大きな魅力となっている。

Horror

『六番目の小夜子』恩田陸

今年の学園祭は、六番目の小夜子が現れる。



その高校には、ある奇妙なゲームが受け継がれていた。「サヨコ」と呼ばれるゲームの主役は、三年に一度、見えざる手によって選ばれる。その年は、「六番目のサヨコの年」と呼ばれていた。そこに転校してきたのは美しく謎めいた少女。その名も津村沙世子。今年の「サヨコ」は彼女なのか？ 沙世子はこの伝説について何か知っているのか？ 疑心暗鬼に駆られる中、始まった文化祭。当日まで一切秘密だった舞台の幕が上がる。タイトルは――『六番目の小夜子』

登場人物の恋愛や友情、学園祭準備のワクワク感、迫り来る受験に卒業。そういったものが、学校という「容れ物」の中でキラキラと展開される。それこそが、得体の知れない「サヨコ」という何かが、ヘビのようにそっと近づいてくる恐ろしさを際立たせる。

Mystery

『心霊写真』はやみねかおる

『きみが見つける物語:十代のための新名作.スクール編』に収録

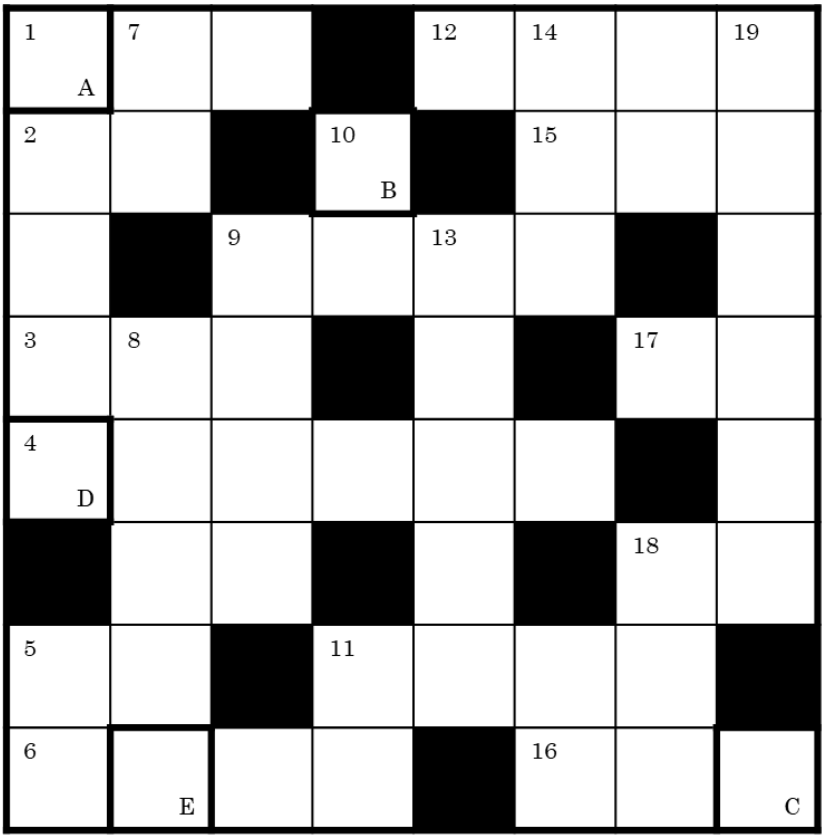
体育祭の思い出に紛れ込む心霊写真の正体は。

楽しかった体育祭の写真を見ていた由香が、いきなり悲鳴をあげて教室を出て行ってしまった。その写真を見てみると、そこには不自然な位置に人の顔らしきものが。もしかして、心霊写真？

古書店に住む小学生の虹北恭助が、同じ商店街に住む響子ちゃんをワトソン役に、商店街でおこった不思議な事件を解決していくシリーズの一作品。大人が読んでも楽しい児童推理小説。

クロスワード

「早稲田」と早稲田大学の図書館利用に関するワードを交えた
クロスワードです！



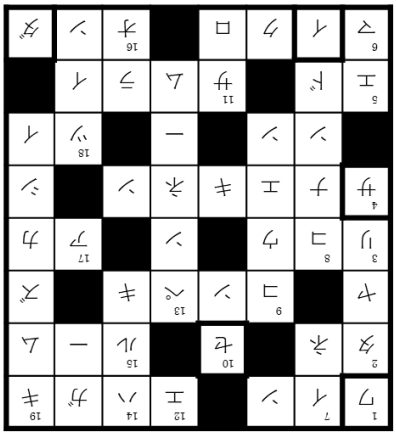
答え

A	B	C	D	E

ヨコのカギ➡

1 早稲田大学所蔵の本を探すなら！蔵書検索―――（カナ読み）
2 草木の発芽のもと。「―――をまく」
3 西早稲田キャンパスにあります！基幹―――学部、創造―――学部、先進―――学部

4 早稲田キャンパス２号館内の図書館。教職員、大学院生を対象としています。高田———研究図書館
5 早稲田大学出身の作家。作品に『D坂の殺人事件』『怪人二十面相』など。———川乱歩
6 原本を撮影しフィルムにすることで、長期保存が可能となった———資料。中央図書館の複写・———資料室で閲覧することができます。
9 早稲田大学応援歌といえば！———の空
11 主君や主家のそば近くに仕える者。武士の別名。
12 裏面に写真・絵のあるハガキ。
15 音楽・映画を楽しむなら。CD・DVDレンタルより、AV———
16 早稲田大学出身の作家。作品に『夜のピクニック』『蜜蜂と遠雷』など。———陸
17 中央図書館の研究書庫。本を探すのに夢中で迷ってしまった！出口はどこ？そんな時は！———と緑の蛍光灯を探してください。その先に答えはあります。



タテのカギ⬇

1 早稲田大学出身の作家。作品に『インストール』『蹴りたい背中』など。（フルネームを記入）
7 「早稲田」の地名は、現在の早稲田一帯が明治３０年代まで茗荷畑と早稲の田んぼの広がる農村だったことに由来します。早稲は——の品種です！
8 イギリスの小説家。シャーロック・ホームズを主人公とする推理小説で有名。———・———ル
9 戸山キャンパス、西早稲田キャンパスにともに近接しているのは？都立戸山———
10 糸のように細く長いもの。直———　曲———
13 筆者・執筆者が本名の代わりにつける作者名。ヨコのカギ５の人物は米国の文学者エドガー・アラン・ポーをもじってつけたそう。
14 早稲田大学出身の作家。作品に『1Q84』『ノルウェイの森』など。村上———
18 早稲田大学先端生命科学センターのある施設。———ズ（カナ読み）
19 我が強く、神経質で扱いにくい様子。「———顔」

解答

A	B	C	D	E
ワ	セ	ダ	サ	ヘ



日本の祭り

私たちの周りには、様々な祭りが存在しています。早稲田大学にも、早稲田祭がありますね。毎年大いに盛り上がる早稲田祭は、多くの学生たちを惹きつける一大イベントです。人々の「熱」を感じさせる祭りは、日本全国、様々な地域で多様な形で行われ、人々を魅了しています。早稲田大学にある書籍を参考にしながら、その地域性や歴史を色濃くにじませる祭りについて、調べてみました。

京都祇園祭

言わずと知れた、京都祇園祭。日本三大祭りの一つとして、多くの人がその祭りの名前を耳にしたことがあるでしょう。清和天皇の時代、京都を中心として疫病が大流行しました。これを祇園八坂神社の御祭神のたたりによるものだとして、神意を和らげる祈願をしたことが、この祭りの始まりであるとされています。恨みを残して死んだ御霊が悪疫を流行らせるという御霊信仰と相まって、祭りの規模は年々盛大になっていきました。約1100年前から始まったとされるこの歴史ある祭りは、文学作品の舞台としても登場します。文豪、川端康成の作品である『古都』には祇園祭が描かれました。

葵祭

こちらも京都の祭りである、葵祭です。京都三大祭りの一つとして知られているこの祭りは、賀茂祭、北の祭りとも呼ばれていたそうです。平安中期の貴族の間では、「祭り」と言えば葵祭を指すほどのものでした。葵祭という名でこの祭りが呼ばれるようになったのは、社殿の御簾や祭員の衣冠、牛車などに葵を飾り付けるからであるとされています。多くの人はこの祭りを実際に目にしたことはなくとも、祭りの名前は聞いたことのある方も多いのではないでしょうか。多くの人が古典として触れる『源氏物語』にも、この葵祭は登場しているのです。

それぞれの祈り



青森ねぶた祭

勇壮な「ねぶた」が特徴的なねぶた祭。こちらは東北三大祭りの一つとして数えられます。毎年多くの個性的な「ねぶた」が登場する他、大型ねぶたはテレビ番組でも中継される程の人気です。そもそも「ねぶた」とは、暑熱の睡魔を払おうとする「眠り流し」という民俗行事に、災厄を払うための「人形流し」、そこに盆の精霊送りである「灯籠送り」などが集合して作り上げられた祭りなのだそうです。

博多どんたく

オランダ語が由来となっている博多どんたく。様々な踊りがパレードのように披露される祭りであるこの博多どんたくの元となったのは、「博多の松ばやし」であるとされています。元々は正月宮中参賀の行事であったものが、博多の商人が領主に年賀の祝いをする行事としても広まり、「博多の松ばやし」となりました。

まとめ

大規模な祭りは、今や日本全国に留まらず、世界にまで知られるようになりました。その地域に根ざし、人々が作り上げてきた「祭り」は、その地域の人々だけでなく、多くの人を惹きつける魅力が存在しているのでしょう。今回祭りについて調べたことにより、その祭りの特徴や成り立ち、魅力を再確認することができました。

参考資料

『祇園祭・花街ねりものの歴史』福原敏男,八反裕太郎 著、臨川書店、2013年
『祭りふるさと東日本』高橋秀雄 著、そうよう、2000年
『祭りふるさと西日本』高橋秀雄 著、そうよう、2000年
『京都の三大祭』所功 著、角川書店、1996年
『日本の祭りと芸能』新井恒易 著、ぎょうせい、1990年
『日本の祭』芸能新潮編集部 著、新潮社、1990年

早稲田大学の学生服

～バンカラ早大生はいつから生まれたのか!?～

現在はない早稲田大学の制服。では早稲田大学ができたばかりの頃は、どのような服装で通っていたのでしょうか？

Ⅰ制服ができたのは明治33年

意外ですが、早稲田大学の前身である東京専門学校ができた明治15年には制服制帽はなく、思い思いの服装で通っていたようです。最初から決まっていたわけではないのですね。早稲田大学歴史館に展示されている「東京専門学校第1回卒業記念全校生徒と教職員」という写真を見ると、一部洋装の人もいますが、ほぼ全員和装で、袴か着物が多く写っていました。

制服の規定が出始めたのが明治33年であり、学生に制服制帽を着るよう義務付けました。

Ⅱ明治35年の制定

明治35年に学生は必ず制服制帽を着るよう公示されました。「それまで全く自由であった服装に、強い規制が与えられたことについて、一部学生間には反発もあった(後略)」(『早稲田大学百年史』より)らしいです。「教場規則」にも教場では制服制帽を着るよう記されました。

Ⅲ制服の形

制服の種類は夏服と冬服がありました。『都の西北　建学百年』(早稲田大学大学史編集所編)に掲載された明治35年の写真だと角帽に房がついています。角帽はケンブリッジ大学のものに似せられたものです。大正初期の写真では角帽(房が付いていないように見える)に袴という姿が多く、これが普通の格好だったようです。

しかし明治37年の修学旅行では角帽に詰襟という学生の写真があります。明治40年には現在と同じ稲穂に大学の2字を置く角帽が作られました。上着は詰襟学生服で、現在の中学・高校生の制服とよく似ています。

Ⅳ女子学生と制服

早稲田大学の創設者大隈重信は女子の高等教育に理解があった人でした。彼は早稲田大学創設者であったと同時に日本女子大学校創立委員長だったのです。前述の『百年史』によると早稲田の学部入学こそ昭和14年に許可されましたが、講義の聴講、付属工手学校への入学は大正10年代から実施されていました。彼女たちの服装は自由だったようで、評価も地味、派手などと様々でした。その後制服導入が検討され実際に仮縫いまでされましたが、太平洋戦争中だったためどこまで徹底されたかは分かっていないようです。

Ⅴ戦後の制服

『都の西北　建学百年』では、「(前略)角帽に、黒の詰襟金ボタンの学生服、そして革靴といういでたちは、(中略)昭和四一年の卒業アルバムでの集団写真では七割見当を占めていた」とあります。戦後20年間程は制服が多かったようです。上記の本は昭和57年に刊行されたのですが、その当時はジーンズが流行っていたようで、制服は一部の愛好家が着ているのみと語っています。しかしながら、現在でも早稲田大学精神昂揚会(早稲田大学公認サークル)の学生や応援団が着用している姿を見ることが出来ます。

早稲田の制服の歴史はいかがでしたか？制服を調べただけでも明治33年に行きつく点が早稲田の奥深さを物語っていますね。そんな早稲田が筆者は好きです。

秩父事件と祭り

Q秩父事件とは？

皆さんは秩父事件をご存知ですか？秩父事件とは、1884年に埼玉県西部の山間に始まった増税などに反対する民衆蜂起事件です。この事件は歴史的にも広く研究され、映画製作者なども事件の紹介に携わり、映画化やドラマ化もしています。事件にまつわる本も多数出版されているのですが、中でも今回取り上げる森山軍治郎『民衆蜂起と祭り　秩父事件と伝統文化』（筑摩書房　1981年）は秩父事件とこの蜂起が起こった場所の祭りについて言及しています。そこで私はこの資料をもとに、秩父事件と祭りの関係を紐解くとともに、祭りが地域にどのような影響を与えているかについて考えていきたいと思います。

そもそも秩父は周りの地域と比べても神社の数も多く、観音霊場が建立されているなど、秩父は昔から信仰心厚い土地柄だったということができるでしょう。そのため祭りの規模も大きく、芝居の開催や花火の打ち上げなどがあったり、頻繁によその村の祭りに参加することもあったそうです。また、養蚕が盛んであった秩父では以下のような歌詞が秩父音頭にあります。

♫　秋蚕しもうて　麦まきおえて
　　秩父夜まつり　待つばかり

この音頭では、蚕の仕事がひと段落すれば、あとは祭りという楽しみを待つだけだと謳われており、ここに住む人にとって祭りがどれほど日常生活に必須のものだったのかがわかります。

現在でもこの地域を代表する祭りとして有名な秩父夜祭りが毎年開催されており、2016年にはユネスコ無形文化遺産に登録され、日本を代表する祭りの一つとなっています。山車の引き回しがあったり、花火も上がるそうなので機会があれば是非皆様も足を運んでみてはいかがでしょうか。

Q住民にとって祭りとは？

話が逸れました。つまり何が言いたいかと言いますと、祭りは働き疲れた民衆たちの心を癒す、大切な行事だったのです。その情熱は熱いもので、明治政府が風紀の乱れを取り締まるために芝居を禁止し、祭り開催が難しい思われた時も、民衆たちは芝居や花火を強行して祭りを成功させました。著者の森山さんはこの行動を通して、祭りの開催自体が秩父に住む人にとっては権力への抵抗だったのではないかと評価しています。ですが、明治政府の禁圧策の強化や生糸生産の大暴落などが重なり、秩父の地域では祭りを行うことが困難になってしまいました。そして秩父事件があった1884年にはいくつかの村の祭りが中止になってしまったという記録があります。森山さんはこの祭りの中止も民衆たちに蜂起を決断させた一因だと考えています。そのくらい当時の人々にとってお祭りは日々の生活の支えだったのでしょう。

お祭り、と言われれば、お囃子など賑やかなものを思い浮かべます。しかし、実際には単なる楽しみとして消費するだけではなく、地域にとってかけがえのないものであったことをこの本を読んで初めて知りました。早稲田図書館には秩父事件に関する本も、お祭りに関係する本もたくさんあります。興味のある方は探してみてください！

本を持て、街に出よう！

みなさんこんにちは！今年の夏は暑かったですよね。クーラーの効いた部屋に籠って連日の猛暑日をやり過ごした人も多いのではないでしょうか？でも、もう11月。そう、秋！読書の秋です！！今回は早稲田周辺が舞台になっている（と思われる）作品を、早稲田大学図書館もしくは学生読書室に所蔵されているものの中から三つ紹介します。本を読んだ後にはそれぞれの作品に登場する場所を探しに、早稲田の街に繰り出してみませんか？

いつもの散歩とは一味違う、文章だけを頼りにその作品の舞台を探す文学散歩。自力で作品に登場する場所を見つけたときの喜びは格別ですよ！もしかしたらあなたの知らない、新しい早稲田の一面が見つかるかも……？

「私は今これほど切りつめられた時間しか自由にできない人達の軽蔑を冒して書くのである。」
_____『硝子戸の中』夏目漱石

漱石は晩年、早稲田南町というところに居を構えました。それが「漱石山房」です。この作品は朝日新聞に連載されたもので、漱石が病気で療養している間、自分と世間を隔てている書斎の硝子戸を通して考えたことなどが綴られています。

ペットや家族の思い出、来客とのやりとりなど様々なエピソードの間に、漱石が暮らした早稲田や馬場のことも書かれています。あの『吾輩は猫である』のモデルになった猫については「初代は宿なしであったにかかわらず、ある意味からして、だいぶ有名になった」と漱石は書いていますが、その猫の後にも二代目、三代目の猫やヘクトーという名の犬も飼っていたそう（この作品には書かれていませんが、文鳥も飼っていた模様）。ちなみにこの「ヘクトー」という名は古代ギリシアの叙事詩『イリアス』に登場する、トロイで一番の勇将の名前なんですって！さすが文学者、ペットの名付けのスケールが大きい！

漱石が生まれたのは牛込、晩年を過ごしたのは早稲田。どちらも大学の近くです。漱石の本片手に空き時間を使って文学散歩、いかがでしょう？

「もしも世界のどこかに一箇所だけ青春のどん詰まりがあるならば、それはこの六畳間に他ならない、と思う。」
_____『神田川デイズ』豊島ミホ

この作品では明確に早稲田とは書かれていませんが、大学の近くに神田川が流れている、という描写や文学部だけ徒歩5分くらい離れたところにある、という描写があることからこれはもう早稲田だろうということでセレクトしました。一人称で語られる全6話の連作短編集で、それぞれの登場人物がちょっとずつリンクしています。ある話の主人公が違う話にも登場するので「あ、この人あのラストの後こうなったんだ」、「あの人こんな過去があったのか」というのがわかるのもこの連作の楽しみのひとつです。主人公は人間関係、将来への不安、自己嫌悪…誰だって一度は感じたことのある、そんな悩みを抱えた大学生たち。周りにそういう人いる！あれ、もしかして自分と似てない？と思わせるような人たちばかりです。

周囲から見ればなんでもないような、でも本人たちにとっては転機とも言える日常の物語。ここでネタバレするわけにもいかないので詳しくは言えませんが、それぞれのラストが印象的でした。

度々出てくる早稲田や大学キャンパス内を思わせる描写にもご注目！！ここってあそこかな？と登場する場所を考えながら読むのも楽しいですよ！

「『お世話になりました』私はアパートに向かって深々と頭をさげた。」
_____『ワセダ三畳青春記』高野秀行

早稲田大学正門から徒歩5分、家賃は月1万2千円。大きな胡桃の木のそばにある木造アパート・野々村荘。その三畳一間(途中から四畳半に)での11年間の記録です。どこか浮世離れした大家のおばちゃんに奇人変人揃いの常軌を逸した住人、作者の属する探検部の仲間たちと繰り広げるハチャメチャな生活。リスキーなビッグイベント・自炊や占い屋台の呼び込み（三味線使用）、幻覚植物の人体実験に「第一次野々村大戦」などなど、書くだけでとんでもなさそうな出来事がどんどん起こります。なぜ「自炊」がリスキーでビッグなイベントかって？それは読んでからのお楽しみ。

前半のドタバタで大笑い、後半では一転して少ししっとりとした雰囲気を味わえます！

ゆかたはどこから来たの？



　みなさんにとって身近な「祭」というと、地域の盆踊りや夏祭りだと思います。その時、「どうせだから浴衣が着たいな」と思うことはありませんか？
　ですがそもそも、なぜ夏祭りや盆踊り（あるいは花火大会も含めて）には、ゆかたで行くのが定番なのでしょうか？伝統だから？しかし、昭和初期ぐらいまで人々は和服を普段着として、身に着けていました。

　つまり、夜に“あえて”ゆかたに着替えて出かけるというのは、最近の出来事なのです。
今回は、ゆかたが「日本の夏」を象徴するものとして認識されるまでをたどっていきたいと思います。

１．ゆかたの起源
　まず、調べるために図書館で資料をさがしました。その時にみつけた参考資料をもとにまとめたいと思います。
　ゆかたは漢字で「浴衣」と書くように、最初は入浴するときに身に着ける簡素な着物として生まれました。そのころは「湯帷子（ゆかたびら）」といわれていて、麻で作られていました。
　ですが、江戸時代に木綿の栽培・製織の技術が発達し、庶民の衣料が麻から木綿にかわったことで、ゆかたが夏の庶民の衣料として普及しました。近年では華やかな色・模様のゆかたが多いですが、伝統的な藍白のゆかたはこの江戸時代の奢侈禁止令によって派手なものを禁止されたのを逆手にとってうまれた“粋”そのものであり、王道と言えるでしょう。
　しかしその後の洋服の普及により、ゆかたは暑い夏の夜涼みのときに着られる服になりました。そして夜涼みの文化が衰退し、ゆかたは夏祭りや盆踊りのファッションとして定着したと思われます。
　また近年よく見かけるようになった甚平は、木綿や麻で作られた単の男性・子供用の室内着です。大正時代に大阪でうまれ、全国に広がりました。半ズボンは昭和４０年頃からセットで販売されるようになりました。

２．ゆかたの基本
　最近ではゆかたは再び日常のファッションとして、夏の昼間でも着られるようになりました。しかし、ゆかたは私たちの普段の服装でいうと、どれくらいの格なのか。例えば、どんなところに行けるのか。着てみたいと考えても、そうしたことがわからず躊躇ってしまう人も多いと思います。
　なので、今回は『伝統を知り、今様に着る　着物の事典』（大久保信子監修、池田書店、２０１１）を参考に、紹介していきたいと思います。

①ゆかたにはどんな種類があるのか
　ゆかたは素材と柄向きによって、遊び着向きとよそ行き向きに大別できます。夏祭りなどで多く着られるゆかたは遊び着向きのもので、普段の洋服でいうとTシャツにジーンズのようなものなのだそうです。半幅帯という帯に素足に下駄を履く服装で、基本的に足袋は履きません。行くところはビアガーデンなどのカジュアルな場所にとどめておくのが無難だそうです。
　これにたいしてよそ行き向きのゆかたは、綿紅梅や綿絽などの上質な生地に、名古屋帯や袋名古屋帯をあわせたものだそうです。足袋をはけばそれなりに格式ばったところや、おしゃれなレストランにも似合ったものとなります。逆に、半幅帯を合わせれば遊び着にすることも可能だそうです。
②ゆかたを着れる期間はどれくらい？
　あくまで慣習的なきまりですが、６月から９月前半にゆかたなどの単衣の着物を着るのが一般的だそうです。ただ、寒い日や大雨の日は避けたほうがいいとのことです。東京では、浅草の「三社祭」（五月なかば）が終わると浴衣で外出してもよいといわれています。

　この本には、ゆかただけでなくいろいろな着物について事細かに載っています。また着物には厳格なルールがないものもあり、この本に載っていることと違うことを書いてある本もあると思います。そういったものを比べてみるには、図書館でその分野の棚をみて、自分にあったものを選ぶのが一番簡単です。もし興味をもっていただけたら、みなさんも図書館に行って調べてみてください。

3．大正ロマン風な着物はいかが？

図書館で資料を探していたところ、おもしろそうな本を発見したので、本題からは少しそれるのですが紹介したいと思います。

それは『大正ロマン着物女子服装帖』（大野らふ、河出書房新社、2008）という本です。大正時代の女性の着物は、柄on柄など、かわいいけど少し派手なスタイルが特徴的で、あこがれはあっても、自分のセンスだけでは躊躇ってしまう方にこの本をおすすめしたいです。

また、その当時の女性（少女）文化についても触れていて、とても興味深いです。

この本では実際にそのコーディネートの一例を紹介しており、いくつか抜粋してみたいと思います。

①散歩着

散歩着は、全体が小紋づけで裾に絵羽模様が入った着物のことで、昼間のパーティのおしゃれ着として生まれました。それまでの華やかな夜用の着物にたいして、すこし控え目なものとなっています。この本で紹介されているのは、濃い紫と薄い紫の縦縞という大人っぽい着物に、小鳥柄の昼夜帯をあわせることで甘さを加えて、絶妙な雰囲気にしています。裾元にはセピア色くらいの落ち着いた色合いで花が描かれており、華やかさを控えめに足しています。

②銘仙

この本で紹介されているのは、単衣の銘仙で、緑色と白の大小のドット模様で、途中で色が逆転する「昼夜」づかいという大正時代の着物の特徴を利用しています。帯はクリーム色の地に、デザイン化された薔薇を染めた昼夜帯を締めています。色も全体的に明るく、柄と柄で派手な印象ですが、クリーム色と白の効果か、実際には爽やかな雰囲気の着物になっています。銘仙とは、大胆で鮮やかな柄行きと光沢のある紬のような風合いが特徴の着物なのだそうです。

4．ゆかた小物をつくってみよう

最後に、みなさんがゆかたや着物を着たときに使えるような、和風な小物の作り方を『やさしい昔の針仕事』（発行人：瀬戸信昭、日本ヴォーグ社、2005）という本から紹介したいと思います。

〈貝の口〉

ボタンやチャックなどをつけなくても、押すだけで開閉の可能な貝の口は、細かいものを持ち運ぶには、おしゃれでぴったりです。作り方は

1．使用済みのクオカード（やわらかいプラスチックのカードならなんでも）を先のとがった楕円状に切ります。

2．同じ形で少し大きくになるように布を切って、端を折って並縫いで止めます。そしてもう一枚同じものを作ります。（一枚目よりほんの少し小さめ）

3．中にカードをはさんで、大きい布に小さい布をかがりつけます。

4．１～３を三枚つくり、それぞれの辺同士をかがりつければ完成です。（一辺だけ縫わない）

洋風の布をつければ、普段から気軽に使えるものが作れます。

この本には、ほかにもにおい袋や針刺し、様々な巾着のつくりかたがのっています。みなさんも縮緬でおしゃれな小物を作ってみませんか？



参考文献：『「かわいい」のルーツがわかる　子どもの着物大全』（似内惠子、誠文堂新光社、2018）
『きもの歳時記』（山下悦子、CCCメディアハウス、2017）※早稲田所蔵
『伝統を知り、今様に着る　着物の事典』（監修：大久保信子、池田書店、2011）※早稲田所蔵
『大正ロマン着物女子服装帖　ポニア式コーディネート術』（大野らふ、河出書房新社、2008）
『たのしい昔の針仕事　今だから新鮮　引き継がれるやさしい小ものたち』
（発行人：瀬戸信昭、日本ヴォーグ社、2006）

戦争と図書館

はじめに

今回のりぶまぐ！3.5は「早稲田」と「祭」の二本立てになっています。ここでは、「早稲田」がテーマということで、今の建物が出来る前の早稲田大学図書館、つまり2号館(今の會津八一記念館の建物)が大学内で主要な図書館だった頃について書いていきます。といっても、今の2号館が早稲田の主要な図書館だったのは、1925年から1991年までと長期にわたります。そのため、ここではその長い歴史の中で、太平洋戦争と早稲田大学図書館という絡みに絞って書いていきます。ちょっと硬いテーマですが、最後までお付き合いください。

もしも、これを読んで昔の図書館について知りたいなと思ってくれた人には、文の最後に参考文献を載せておいたので、ぜひ読んでみてください。

戦争の足音

1930年代に入ると、世間ではだんだんと戦時色が強まってきていました。『早稲田大学百年史　別巻Ⅱ』によると図書館の日常業務は大きな支障なく行われていましたが、図書出版に対する国の統制強化によって、不適切と判断された図書の購入撤回が起きていました。また、戦没学生の図書の寄贈が相次いだり、図書館の屋上で高射砲の訓練が行われたりと、少しずつ戦争の影は図書館にも近づいていたそうです。やがて、戦局が不利になるにつれて、図書館も所蔵資料について何らかの対応を迫られることになりました。『早稲田大学百年史』によると、1943年に設立された「私立大学図書館協会」の協議事項には、「貴重図書の疎開」「図書分類上の朝鮮、台湾、樺太等の地理的区別の扱い」といった事項が並び、この時期の図書館界の動向を読み取ることが出来ます。

空襲と図書館

1944年以降、日本各地で頻発する都市の空襲は図書館にも大きな影響を与えました。この年の末には図書館や演劇博物館が所蔵する、国宝や貴重書を埼玉県の個人宅に疎開するようになりました。この貴重な資料の疎開は1945年

の終戦直前まで継続され、疎開先の個人宅には館長の生家が充てられたりもしました。

そのような中、1945年の5月に大学にもついに焼夷弾が投下されました。図書館は被害を免れたものの、大学施設は商学部や理工学部(この時は今の早稲田キャンパスの場所にありました)の建物が全焼もしくは半焼するなど大きな被害を受けました。また、戦後に第九代総長になった時子山常三郎の回顧録などによると、演劇博物館にも周囲の火事が燃え移ったものの、演劇博物館の職員の機転でかろうじて建物上部の焼失に止めることが出来たのです。

終戦と再建

1945年8月15日まで続けられた疎開図書の荷造りは、終戦を受けて中止され、原状復帰させることになりました。その後、図書館は疎開させていた資料を引き取ることと並行して、早くも9月11日には昼間に限ってはありましたが、閲覧業務を再開しました。翌46年には夜間の閲覧も再開し、図書館は平常の様子に戻っていきました。

おわりに

ここまで、戦災と中央図書館というテーマで、図書館が戦争に対してどのような行動をとったのかについて書いてきました。

私たちは多くの場合、図書館を何か情報を得るための場所として利用することが多いと思います。しかし、その図書館自体にもまた何らかの情報(ここでは歴史について)が眠っていることは多々あります。ここで触れられたものはその中のほんの一部に過ぎません。これをきっかけにして、もっと私たちの身近なものに関する知識が深まっていく事を期待しています。

参考文献

- 早稲田大学図書館 図書館史編纂委員会編『早稲田大学図書館史—写真と資料で見る100年—』(1990年、早稲田大学出版部)
- 時子山常三郎『早稲田生活半世紀』(1973年、時子山先生古稀祝賀会)
- 島善高『早稲田大学小史[第2版]』(2005年、早稲田大学出版部)
- 早稲田大学 大学史編集所編『早稲田大学百年史　第四巻、別巻Ⅱ』(1992年、1989年、早稲田大学出版部)

気になる大学祭

秋は大学の学祭が盛り上がる季節。
大学祭では、いつもとは違う熱気を感じることができて、わくわくしますよね。
ここでは、学術情報検索から利用できる新聞記事データベースを使って、昔の大学祭についての気になった記事を紹介します。
昔の新聞記事って面白い！と感じたら、実際に気になる記事を探してみてくださいね。

※主に、朝日新聞『聞蔵Ⅱビジュアル』と読売新聞『ヨミダス歴史館』を使用

大学祭のはじまり

まず、大学祭のはじまりをみてみます。
大学祭が全国的に大学全体で行われる、現在のような形になったのは1950年代なかばといわれています。※
最初に行われたのがいつか明確には分かりませんが、東京大学の「五月祭」などは大正時代からすでに開催されていました。読売新聞には1924年に五月祭の起源といわれる「帝大園遊会」の記事が、朝日新聞には1935年に「五月祭」の名称で記事が載せられています。また、他にも「大学祭」という名称とは別の呼び方で開催していた大学もありました。

※ジャパンナレッジLib　『日本大百科事典』「大学祭」より

記事をみてみよう

実際に新聞記事検索で気になった見出しから、記事を掘り下げます。

「帝大の園遊会」

先ほど紹介した1924（大正13）年の東京大学の「園遊会」の記事。何が行われていたのでしょうか。記事には、

学部解剖教室の人間の輪切、理学部地質教室の古代生物の化石や骨格（中略）など非常の人気を集め…（中略）
新国劇沢正一座の地蔵経由来や国定忠治の立ち回りなどにやんやと熱叫し夜は又キネマのニコヽ大会でおとがいをはずして一日を楽しんだ

（『読売新聞』1924年5月25日　朝刊「帝大の園遊会」）旧字体は新字体に改めた

などと書かれています。「沢正（さわしょう）」とは新国劇を結成した俳優の沢田正二郎の愛称で、『国定忠治』は特に人気の演目でした。このように、人気の演劇や映画など、「園遊会」は研究成果を公開するアカデミックな場であると同時に芸術を楽しむにぎやかなイベントでもあったのではないでしょうか。
なんだか、現代の大学祭と似ている気がしますよね。

「ダイコンを手に踊る大学生」

東京農業大学が63周年を記念した収穫祭（学園祭）を開催した記事です。

土の香りも新鮮なダイコンやニンジンを手に手にはしゃぐ大学生の一団が　現れて東京人種のドギモをぬいた。（中略）凶作の秋にもかゝわらず同校の農園ではダイコンもサツマイモも上々の豊作でトラックいっぱいに積み込んだ野菜の山を、集まった家庭の奥さんたちに無料サービスもし（中略）若い顔が同校名応援歌“青山ほとり”をうたいまくっていた。

『読売新聞』1953（昭和28年）11月6日夕刊　「ダイコン手におどる大学生 農大63周年の収穫祭」

ダイコンを手にもって踊るの…？と不思議な気持ちになりましたが、実は“青山ほとり”（通称大根踊り）は農大で現代まで続く有名な応援歌。しかしこの記事を見ると、当時実際に目撃した人々はかなり驚いたのではないかと想像できます。

実際に収穫した野菜を用いたパフォーマンスは農業大学ならではの取り組みで、その斬新さや大学生の若い勢いが記事から伝わってきます。

「ガーデン・パーティー」

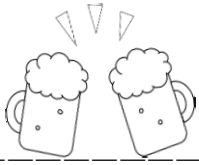
1961年に東京教育大学（現在の筑波大学の母体となった大学）の学園祭「桐葉祭」の初日に行われたガーデンパーティーの様子が書かれた記事です。

中庭に机とイスが持ち出されてにわか造りの“ガーデン”だが、お飲み物は本物の生ビール、いっぱい百円、おかわりすれば十五円安という仕組みで、ことし最高の暑さも手伝ってたいへんな売れ行き…

『読売新聞』1961（昭和36年）5月27日　朝刊「初夏の夜を楽しく 教育大学桐葉祭のガーデン・パーティー」

ガーデンパーティーというとあまり想像がつきませんが、記事によるとビアガーデンのような感じのようです。今は大学祭でのお酒の販売が規制・禁止されている場合があるので、このように記事に取り上げられているのを見ると時代を感じてしまいます。他にも、ステージではかくし芸やフラダンスなどが披露され、学生も教授も楽しんだことも書かれていました。

また、*「今年最高の暑さ」*という文。今年2018年も酷暑と言われていたなあと思い、気象庁のHPから当時の気温を調べてみると…1961年5月27日の最高気温は29.1℃。5月で30℃近くの気温ということで、ビールが良く売れたという記事にも納得です。



大学祭をテーマに、新聞記事を紹介してみました。現代の大学祭と比較して考えてみると、時代が隔たっていても共通する大学祭の雰囲気がありました。また、記事の取り上げられ方からも、当時の人々の関心や時代の変化をみることができます。新聞記事データベースは学内でも自分のPCでもできるので、ぜひ色々活用してみてください。

大隈重信と自動車

はじめに

今回は**“早稲田”**がテーマという事で、本ページでは皆さんもご存じの早稲田大学創設者である大隈重信について書いていきたいと思います。大隈重信に関する研究は数多存在しておりますが、今回はあまり注目されない大隈重信と自動車について紹介していきたいと思います。大隈重信と自動車と言われても多くの人はピンと来ないかもしれませんが、日本における自動車文化を振り返る際に、その創成期の代表的な自動車愛好家として登場してくる人物ですので、クルマ好きの皆さんはもちろんの事、早稲田生であれば知っておいて損はありませんので、少々お付き合いいただければと思います。

大隈重信と自動車

では、さっそく大隈重信と自動車について見ていきましょう。

まず、大隈重信が初めて自動車を購入したのはいつだったのでしょうか？文献によってその時期がずれていますが、その中のいくつかの文献 **※1** を照らし合わせると明治39年（1906年）12月であると推測が出来ます。その際に購入した自動車はフランス製のオチキス（ホチキス）という中古車でした。その自動車を動かすために雇われていた林平太郎氏によると、

“自動車と云うのも名許りで、好い加減に使い切つた古車でタイヤにも泥が詰つて居て一度外出すると屹度一度は動かなくなる、パンクをするやらエンヂンに故障が起る、それでも侯爵は必ず外出には自動車に乗る、仕方がないから最後には外出毎に幌の人力車を後からつけて行つたものです”

と語っておりその程度の悪さはかなりのものであったと想像が出来ますが、それでも大隈重信は自動車を手放すことはなく愛用していたようで、同じく林氏は

“タイヤが破れるとアメリカへ注文せねばならぬし之が来るまで六箇月間もかゝる、その間でも侯爵は自動車でなければ承知なさらぬ、已むを得ず破れたタイヤに藁を詰めて走つたものでずいぶん泣かされました”

と語っています **※2** 。この事が物語るように大隈重信は自動車の持つ便利さに惚れ込み、大層自動車を気に入っていたようです。そのことはその他の文献からも読み取る事ができ、大隈重信は『グラヒック』 **※3** において以下のように語り、自動車の便利さを認めるとともに日本の発展への想いを持っていたことが読み取れます。

“今や歐米諸國は自働車の時代だ。啻に紳士の乘用とするばかりではない。啻に荷物運搬の用に供するばかりではない。之を各種の事業に應用せんとして、種々の試驗をしている。或は之を農耕に應用せんとしているものである。乘用としては固より今日の處ではそれに上越すものはない、其の乘心地の善い事と言つたらない、一度それに乘ると、復た他の乘物には乘りたくない。更に其の時間の節約に至つては、流石に文明の利器で、何人も金さへあれば、之を利用すべきであるが、惜しい事には其價が不廉なので、貧乏の日本では尚ほ未だ大に利用せらるゝに
至らない、何事も去來となると金の問題であるが、之が爲めに何時も日本が西洋諸國に後れを取ると云ふのは誠に殘念の至りだ。”

このように熱心な自動車愛好家であった大隈重信ですが、ただ自動車を愛用しただけではなく、社交的機関としての側面に加えて自動車関連税制や法制などにも参画した日本自動車倶楽部（明治43年組織）の会長としても活動し、日本の自動車文化や産業の発展にも貢献していました。

※1　朝日新聞（1906年12月9日）、西川（2004）※2　朝日新聞（1922年1月8日）

では、そもそもなぜ大隈重信はここまで自動車を愛好したのでしょうか？今回複数の文献を当たりましたが、その明確な理由は分かりませんでした。しかし、小林（2015）の指摘は興味深いものとなっています。大隈重信は明治22年（1889年）10月に外国人判事導入問題で玄洋社の来島恒喜から爆弾を投げられたことにより、右脚を切断するに至りました。このような身体的な不自由さから自動車を愛好したのではないかと推測されています。

大隈重信が常に自動車を愛用していたのは先述しましたが、当然アクシデントも発生しておりました。大正4年（1915年）5月には御前会議から早稲田の私邸に帰宅する途中に自転車や洋服店と衝突する事故が早稲田大学の近くである早稲田鶴巻町で発生し、大隈重信には別状がありませんでしたが、偶然洋服店に居合わせた早大生が擦過傷を負ったそうです**※4**。当時は自動車の運転技術が未熟であっただけでなく、道路も現在のように整備されてはおらず事故は珍しいものではありませんでした。

最後にその後の動向を見ていきましょう。オンボロのオチキスを購入した大隈重信でしたが、後に故障の少ないキャデラックを購入したそうです。その後も自動車を愛用し続け、大正11年（1922年）1月10日に亡くなり17日に葬儀が行われた際にも当時ではまだ多くは無い霊柩自動車が使用されたとのことで、最後まで自動車と共にあった大隈重信でありました。

※3　『グラヒック』第三巻第六号（1911年3月1日）p.5

※4　読売新聞（1915年5月7日）

終わりに

ここまで大隈重信と自動車について見てきましたが、いかがでしたか？自動車がまだ珍しく社会の冷たい目もある時代において、これから「瀑發瓦斯の時代」が来ると先見の明を持ち自動車を愛用し、そして発展に貢献した大隈重信は、まさに『進取の精神』を有していたと言って良いのではないでしょうか。皆さんも、色々なものに目を向けて何事にも捉われずに、進んで新たな事に挑戦してみてください。その際には、ぜひ知の宝庫である早稲田大学図書館を活用してみてください。今回は利用方法などの詳細には触れませんでしたが、他のページで取り上げていますのでそちらを参照して活用してみてください。このページはその活用方法の一例として、皆さんの一助になれば幸いです！

参考文献

- ✓ 朝日新聞社「聞蔵 II ビジュアル」⇒朝日新聞（1906年12月9日）、（1922年1月8日）
- ✓ 読売新聞社「ヨミダス歴史館」⇒読売新聞（1915年5月7日）
  《早稲田大学図書館学術情報検索　http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/》
- ✓ 小林英夫（2015）「日本で自動車はどう乗られたのか」，アジア太平洋研究センター（WIAPS）『アジア太平洋討究』第25号，pp.29-48
  《早稲田大学リポジトリhttps://waseda.repo.nii.ac.jp/　ISSN1347-149X》
- ✓ 佐々木烈（2012）『日本自動車史　写真・資料集』三樹書房
  《中央図書館　B1研究書庫　537.00137他》
- ✓ 西川稔（2004）「名士と自動車（1）大隈重信侯と自動車」，トヨタ博物館『トヨタ博物館だより』No.59（2004年3月号）
- ✓ 西川稔（2004）「名士と自動車（2）大隈重信侯と自動車」，トヨタ博物館『トヨタ博物館だより』No.59（2004年6月号）
  《http://www.toyota.co.jp/Museum/kandayori/backnumber/》
- ✓ 有楽社『グラヒック』，第三巻第六号（1911年3月1日）
  《中央図書館　B2大型本コーナー　文庫10　07474》

早稲田祭の歴史を紐解く！

2018年11月3日、4日。何の日だかわかりますか？
そう！早稲田生の情熱とプライドが溢れる早稲田祭の日です！！
でも、早稲田祭っていつから開催されているんでしょう？

• 調べてみよう

早稲田大学公式の『早稲田大学百年史』をインターネット上で閲覧しました。キーワード検索もできます。「早稲田祭」と入力すると、14ページのヒット。

早稲田大学百年史（以下、「百年史」と省略）総索引年表総索引298ページによると、早稲田祭の準公式第一回は昭和24年。結構最近ですね。11月1日から11月15日までの二週間にも及ぶ祭典でした。その後、昭和29年に大学側の意向を無視して開催した早稲田祭を第一回と数えているようです。この時、学生は大学当局に五日間の全学休講と、教室を開放して会場として利用させることを要求し、催し物を集中的に行う案を立てましたが、大学側は五日間もの全学休講に難色を示した上、完全な全学的催しでない以上、補助金の支出は認められないと回答したようです。

もっと早稲田祭のことが知りたいな。そこでWINEのキーワード検索を使ってみました。「早稲田祭」と入力すると、ヒットした資料の中に気になるものが・・・。『[早稲田大学]法学部祭』をはじめとしていくつか「法学部祭」というものに関わりがありそうな資料がありますね。一体どんな資料なのでしょうか。そして、法学部祭と早稲田祭の関係は？

～ちょっとよりみち～
今回使った図書館の設備
→レファレンス
今回は「早稲田大学百年史」のオンライン版の使い方を教えていただきました。図書館で図書館員の方が調べものの相談に乗ってくださいます。レポートを書く際など「資料の探し方がわからない！」と思ったらぜひ使ってみてくださいね。　（代わりに書いて、はダメですヨ）

・調べてみよう～『[早稲田大学]法学部祭』～

WINEの検索でヒットした資料の実物を見に中央図書館に行きました。その正体は・・・法学部祭の際に法学部祭実行委員会が作成したパンフレットでした。

法学部祭って何だろう。実は、早稲田祭は一時開催が中止に追い込まれたことがありました。正常な状態で早稲田祭が行われることが難しくなった中、学生自ら自由な表現の場を求めて開催したのが「法学部祭」だったようです。

パンフレットによると、内容は、前夜祭、学習講演会、映画会上映会、シンポジウム、クラスの出し物、ゼミの企画など多種多様。第一回法学部祭が行われたことを皮切りに、サークル自主祭典、理工展の開催へとつながったようです。早稲田祭復活のためにまず動きだしたのが法学部というのが興味深いですね。

そして、すべてのパンフレットの冒頭に「法学部祭実行委員会アピール」という文章が入っています。自分たちの置かれた厳しい現状。それにも負けず、自分たちのやりたいことにまっすぐに突き進む強さ、早稲田祭の復活への願い・・・

ものすごい熱量！譲れない熱い思いが伝わってきます。・

早稲田大学百年史より
昭和24年（1949年）11月1日-11月15日　早稲田祭（準公式第1回）開催
昭和29年（1954年）11月20日-11月24日　大学側の意向を無視して早稲田祭挙行（のちにこれを第1回と数える）
（参考）早稲田大学百年史第五巻ｐ.822，ｐ823　早稲田大学百年史総索引年表ｐ.298，ｐ.303

・おわりに

最初は早稲田祭の始まりみたいなものを調べることが出来たらいいなあと思っていたのですが、今まで思いもしなかった一面を見ることになりました。

今は日本一の来場者数を誇る早稲田祭。

そんな早稲田祭にも影の歴史があったことを知っている人はものすごく少ないのではないでしょうか。多くの人に愛される早稲田祭がこの先もずっと続きますように！

＼注目！図書館資料から探る／

100年前の早稲田大学生活

かつての大学生はどんな学生生活を送っていた!?

==========

みなさん、こんにちは。
突然ですが、「学生生活」といえば…？
授業、サークル、アルバイト。
あるいは友人や恋人と過ごす何気ない日々でしょうか。
創立136年の早稲田の地では、数十万通りの学生生活が送られてきました。
かつての学生生活がどんなものだったのか、気になりますよね。
今回は図書館資料を使って100年前の早大生の姿に迫ってみましょう！

»資料を探してみる
資料を探すためにWINEで検索します。早稲田大学に関する資料を一括で調べたいので、「早稲田大学」で件名検索をかけると…1922年出版の『早稲田大学之今昔』という本が出てきました。古い時代の資料の方が当時の生活を当事者の目線で知ることができそうです。
配下場所の中央図書館B1書庫では「早稲田分類」と呼ばれる早稲田大学図書館独自の分類が使われていて、中でも早稲田大学に関する資料には［ト10］という記号が与えられています。
早速探しに行くと、うわぁ、たくさん！大学史や写真集から歴代の受験資料や科目案内まで実に様々です。今回の目的は100年前の学生生活を知ることなので、背表紙を見て古そうな本を選びます。
『早稲田大学之今昔』に加え、『早稲田物語』という本が見つかりました。
なんと同じ題名の本が2冊あります！これら3冊から当時の様子を探っていきましょう。

»本の内容を簡単に紹介（以下、旧仮名遣いはすべて新仮名遣いに改めた）
①『早稲田大学之今昔』早稲田大学（1921年）
創始者である大隈重信をはじめ、学長を歴任した人物の演説計７本と当時の教職員や校規などの情報が収録されています。

②『早稲田物語』高浜三郎（1928年）
学生（4年生）が書いた本で、受験勉強や大学街についての記述がある一方、大学に関する公式情報も載っていて、序文によると大学お墨付きのようです。

③『早稲田物語』赤木光二郎（1916年）
卒業生が書いた本で、上京してから卒業するまでに体験した日々の出来事が綴られた随筆です。等身大の学生生活がうかがえます。

「青春　それは永遠の未来である」　高浜三郎（序文より）

「私たちが描いた東京じゃないね。これは、それよりも貧弱な東京だね」
高木光二郎（上京後、友人と語った言葉）



■大学とキャンパス

①には当時の学生の心得や学部についての情報が載っています。心得には「学生は校の内外を問わず常に学生証を携帯すべし」や「鉄道、乗車、乗船に関する身分証明書及割引証は学生課に就き（略）」などと書かれ、大正時代にも学生証や交通機関の学割制度があったようです。③には夏に試験が終わったら実家に帰省する話が出てくるので、学割を使っていたかもしれません。学部は1919年時点で政治経済、法、商、文、理工の5学部があり、1920年に大学令が出た際にはすでに総合大学として機能していたことがわかります。

また、キャンパスにはポプラや銀杏が立ち並んでいたそうで、銀杏並木のある現在の早稲田キャンパスと共通していますね。早稲田のローカルカラーは「がらくた」で、様々な学生がいるとも書かれていますが、これは現在の「多様性」につながっているかもしれません。

■学生生活その1

②には受験や入学直後の生活についての記述がありました。「入学試験は（略）ややもすれば冷たい宣告を与える冷血な裁判官でもある」とか「十六時間は全く勉強の支配下にあって苦しい時間を過ごす」などと書かれていて、受験生の苦悩が垣間見えます。それだけに入学は格段の思いに溢れたものであり、新生活への期待や緊張が伝わってきます。授業が始まると部活動や研究会によって新入生歓迎会が開かれたり、友人の下宿に遊びに行ったり。学生の多くは音楽や美術に親しみ、下駄にステッキで早稲田の街を闊歩していたそうです。

■学生生活その2

③には今と変わらぬ悩みや学生生活の数々が登場します。上京時の故郷との別れ、進路に関する家族との意見の相違。友人が意外にも恋に落ちてしまった話や野球の応援に行った様子も書かれています。また、当時から聴講生制度があり、講義を通じて年配の人や目の不自由な人と知り合いになったようです。本科はテスト期間が約10日間で、校庭のベンチに腰かけて勉強している学生も見かけたということで、現在の学生と変わりませんね。卒業祝いのパーティーは築地精養軒で行われたそうです。

»おまけ

ここまで紙の資料を見てきましたが、最後に図書館HPの学術情報検索から朝日新聞の聞蔵Ⅱビジュアルで過去の記事の縮刷版で調べてみます。「早稲田大学」と検索すると、その数は膨大。明治時代に学生募集の新聞広告があったことや海外に留学生が派遣されていたことなどがわかります。中でも、③に登場する沙翁（シェークスピア）三百年祭についての記事を見つけることができ、③の著者が1915年まで在籍していたことが読み取れました。



100年前の学生の姿を図書館資料から探ってみましたが、そこには21世紀に生きる私たちとの共通点がたくさんありました。早稲田大学図書館には、古今東西の様々な資料が数多く眠っています。みなさん、ぜひ活用してくださいね！

世界の祭り

皆さんは、海外旅行のとき、その国の祭りに行ったことはあるでしょうか？

この記事では、個性的なものが多いヨーロッパの祭りを、季節ごとに分けてご紹介します。

・春の祭り

1月から3月にかけて、ヨーロッパのみならずキリスト教国の各地で、「カーニヴァル」(謝肉祭)が行われます。ブラジルのリオ・デ・ジャネイロのものは、テレビなどで目にしたことのある方も多いのではないでしょうか？ヨーロッパでは、フランス・ニースや北イタリア・ヴェネチアで開かれるものがとくに有名です。

3月にスペインに行くなら、東部バレンシアの「ラス・ファジャス」は欠かせません。街に林立した巨大な張り子が、最終日の夜に次々と燃え落ちていくさまは、圧巻の一言に尽きます。またスイスでは、「チャランダマルツ」という、カウベルを鳴らして冬を追い払う祭りもあります。

魚が好きな人には、5月に開かれる「魚祭り」がおすすめです。北イタリア・カモッリで行われるこの祭りでは、揚げた魚を無料で食べることができます。

・夏の祭り

6月、ヨーグルトで有名なブルガリアのカザンラクでは、「バラ祭り」が行われ、バラ畑でバラの収穫を祝います。

北に目を転じると、6月下旬の北欧やバルト三国では、「夏至祭」が開かれます。これらの国々は緯度が高いため冬が長く、そのため夏の到来を盛大に祝います。

7月には、スペイン北部・パンプローナで「サン・フェルミン祭」、通称「牛追い祭り」があります。人々が全速力で走る巨大牛を追いかけるというエキサイティングなこの祭りは、ヘミングウェイ『日はまた昇る』で有名になりました。

・秋の祭り

20歳以上の方は、9月~10月にドイツ・ミュンヘンで開かれる「オクトーバー・フェスト」に参加してみてはいかがでしょうか？この祭りは2週間もの長きにわたり、人々は連日ビールを味わい、宴会が続きます。

11月には、収穫を祝ってスイスやドイツで「聖マルティン祭」が行われます。ドイツでは、ハロウィーンの時のように子供たちが街をめぐってお菓子をもらいます。

・冬の祭り

12月、寒い国に、ろうそくの明かりがともります。スウェーデンで行われる、「聖ルシア祭」です。この日はかつての冬至にあたり、春の近づきを祝います。

やがて年の瀬も近づいたころラトビアで「冬の祭り」が開かれます。老若男女がこぞって動物の仮装をし、お祝いの歌を歌いつつ街をめぐります。

・番外編

どの国であっても、独立記念日は盛大に祝われます。例えばアメリカでは、イギリスから独立宣言した7月4日には、花火が打ち上げられ、大食い大会が開かれます。

また9月16日にオーストラリアから独立したパプアニューギニアでは各部族が仮装して踊るなどします。

・まとめ

いかがでしたか？ガイドブックでの知識だけでなく、実際に現地に行って、自分の目でその国の祭りを見ると、もっとよくその国の文化や伝統が理解できます。

お読みいただき、ありがとうございました。

・参考文献

・芳賀日出男監修(2006)『世界の祭り大図鑑』PHP研究所
・「地球の歩き方」編集室(2014)『地球の歩き方 ヨーロッパ』ダイヤモンド社
・冷泉彰彦(2013)「アメリカの「独立記念日」が「花火とＢＢＱだけ」である理由とは？」
https://www.newsweekjapan.jp/reizei/2013/07/post-572.php （ニューズウィーク日本版） ※中央図書館で過去のものを含めて、紙媒体で所蔵をしています。

ようこそ、祭の狭間

おやおやこれはこれは・・・
こんな辺鄙な場所にようこそいらっしゃいました。
まあゆっくりしていってくださいませ。
いや仰らなくても分かります。祭の喧騒から少し離れたくなったんでしょう？そうでなくてはわざわざこんなところにいらっしゃいませんよねえ・・・
それとも初めからここにお越しくださるつもりで？そうでしたら嬉しい限りですが・・・
まあ丁度そんなお客様にピッタリの本がここにありまして・・・この『宵山万華鏡』という本がですね・・・
え？「宵山」ってのは何かって？
まあまずそこからですよねぇ・・・
ではこちらの『ドキュメント祇園祭』をご覧ください。この本の特に第四章をお読みいただけば、祇園祭と宵山について理解して頂けると思います。
まあ華やかな催しなのですよ。絢爛豪華な山鉾に、大勢の人で賑わう大通り・・・ですが、光あるところには必ず影があるものでございます。

の場所へ・・・・・・

『宵山万華鏡』に戻りましょう。
物語は全体で見ると二部構成、前半で見えなかったことが後半に別視点でみえてくる・・・
この作品は二面性が一つのテーマとなっています。
煌びやかなお祭りとその裏にある昏い世界の対比が見事ですねぇ。
賑やかな表から外れて、こんな静かな場所に来たお客様にはぴったりかと思われますよ。
はい？もう行ってしまうのですか？
もう少しくつろいでいてもよろしいのですよ？
それにもうここに入ってしまったからには向こう側には・・・
ああいえいえ何でもありません。
そこまで戻りたいのでしたら無理には引き止めません。
どうぞ道中お気を付けて。
私も無事戻れることを祈っていますよ。
ええ本当に、あそこにまた戻れるといいですねえ。
それではさようなら。

＊記事の本文内で紹介が出来なかった参考文献の一覧です。気になった本はぜひ手に取って見てください！

参考文献一覧

不穏な学園祭

・『秋の花』北村薫、東京創元社、1991年
・『六番目の小夜子』恩田陸、新潮社、2001年
・『きみが見つける物語 十代のための新名作 スクール編』
あさのあつこ［ほか著］、角川書店、2008年

WASEDAクロスワード

・『日本国語大辞典』「ジャパンナレッジLib」、NetAdvance、https://japanknowledge.com/library/、(参照2018-09-12)
・『日本歴史地名大系』「ジャパンナレッジLib」、NetAdvance、https://japanknowledge.com/library/、(参照2018-09-02)
・『世界大百科事典』「ジャパンナレッジLib」、NetAdvance、https://japanknowledge.com/library/、(参照2018-09-12)
・『複写・マイクロ資料室(中央図書館4階) 早稲田大学図書館利用案内No.12』早稲田大学図書館、https://www.waseda.jp/library/assets/uploads/2016/12/no12_microforms.pdf(参照2018-09-12)
・『TWIns 早稲田大学先端生命医科学センター(TWIns)』、早稲田大学、https://www.waseda.jp/inst/twins/(参照2018-09-12)

早稲田大学の学生服

・『都の西北 : 建学百年 Waseda university a photographic history of 100 years(1882～1982)』、早稲田大学大学史編集所編、早稲田大学、1982
・『早稲田大学100年』https://chronicle100.waseda.jp/index.php、早稲田大学、最終閲覧日2018.09.10

本を持て、街に出よう！

・『硝子戸の中』夏目漱石、新潮社、2011年
・『神田川デイズ』豊島ミホ、角川書店、2007年
・『ワセダ三畳青春記』高野秀行、集英社、2003年

気になる大学祭

・「帝大の園遊会」『読売新聞』「ヨミダス歴史館」1924年5月25日朝刊3頁
・「帝大五月祭」『朝日新聞』「聞蔵 II ビジュアル」1935年5月6日夕刊 2頁4段
・「ダイコン手におどる大学生 農大63周年の収穫祭」『読売新聞』「ヨミダス歴史館」1953年11月6日夕刊3頁3段
・「初夏の夜を楽しく 教育大学桐葉祭のガーデン・パーティー」読売新聞「ヨミダス歴史館」1961年5月27日朝刊9頁3段
・「大学祭」『日本大百科全書』「ジャパンナレッジLib」最終閲覧2018/8/26 https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000141371
・「沢田正二郎」『日本大百科全書』「ジャパンナレッジLib」最終閲覧日2018/2/26　https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000101614
・東京大学「五月祭」https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/events/h10_01.html　最終閲覧日2018/8/26
・気象庁「東京　1961年5月（日ごとの値）」「各種データ・資料/過去の気象データ検索」より　　最終閲覧日2018/8/26 http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily_s1.php?prec_no=44&block_no=47662&year=1961&month=5&day=&view=

100年前の早稲田大学生活

・『早稲田大学之今昔』早稲田大学 編纂、早稲田大学、1921年
・『早稲田物語』高浜三郎、東亜堂書房、1928年
・『早稲田物語』高木光二郎、敬文堂書店、1916年
・「沙翁三百年祭の準備」『朝日新聞』「聞蔵 II ビジュアル」1915年12月21日　朝刊 5頁4段

ようこそ、祭りの狭間の場所へ……

・『宵山万華鏡』森見登美彦、集英社、2009年
・『ドキュメント祇園祭―都市と祭と民衆と―』米山俊直編、日本放送出版協会、1986年

※本紙掲載の書影等の著作物は、すべて出版社からの許諾を得て掲載しています。
※本紙掲載の写真、記事、図版等を無断で転載・模写することを禁じます。
※本誌は執筆者の許諾を得て電子化し、「早稲田大学リポジトリ」で公開されます

『りぶまぐ！』vol.3.5　2018年10月発行

編集・発行：早稲田大学図書館・ボランティアスタッフLIVS

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学図書館 利用者支援課

TEL：03-5286-1659　　http://www.wul.waseda.ac.jp/CLIB/livs/


家